

明石市

# 国際協力海外レポート

栗田 哲也（くわた てつや）【JICA 青年海外協力隊】

赴任地：フィリピン共和国 イロイロ州ギンバル町  
職種：コミュニティ開発  
赴任期間：2017年4月～2018年12月（予定）



こんにちは。早いもので、すでにフィリピンに派遣されて5か月が経ちました。まだまだ活動はこれからですが、現在行っている活動の一部をご紹介します。

## 【メインの活動について】

私の派遣区分はコミュニティ開発というカテゴリーに分類されていますが、実質的な業務内容は障害者支援です。私は二代目の派遣であり、基本的な活動としては地域を回って各障害者への個別支援の内容を考え、それを実施することです。

障害者と一言で言っても、障害の内容や程度は人によってばらつきがあります。

私が訪問している障害者の人達は、程度でいうと比較的重度に分類されるので、家から殆ど出ない方も大勢います。必然的に社会との関わりも薄くなるので、そういった方々の生活をいかに向上させるかというのが活動の根幹にあります。

数点事例を挙げてみようと思います。

## <20代、発達不全の女性のケース>

過去にいじめられた経験により学校を辞め、家の手伝いをしながら生活しています。

記憶力や認識能力に多少難はありますが、普通に意思疎通は可能であり、将来的にお店を持つという夢があるため、数の数え方や文字の書き方などを学んでいます。

最近特別支援学級に通い始め、今後の展望も楽しみです。



### <10代、小児麻痺の女の子のケース>

四肢の麻痺があり、自立歩行が困難な女の子の事例です。過去の隊員の助言により、庭に竹製のリハビリ用手すりを設置。歩行訓練や足の筋肉をつけるための筋力トレーニングなどを行っています。弟が一人おり、その子が小学校に上がれば母親の手が空くので、特別支援学級に通う予定です。通学に備え、数の教え方や文字の書き方などを教えています。麻痺の影響で握力が弱く、文字を書くのに苦勞するため、握力向上のためのリハビリも並行して行っています。学習意欲は非常に高く、今後の成長に期待しています。



### <40代、脳性麻痺の男性のケース>

脳性麻痺により、言葉による意思疎通が困難な男性の事例です。簡単な家事は行えるため、チェックリストを用いてそれを習慣化出来るように支援しています。

また、日常における楽しみを感じてもらえるように遊び相手も務めています。他の支援対象者に比べて読み書きや計算の能力が高く、何か課題をこなすたびにこちらが驚かされています。



### <10代、四肢一部欠損の女の子のケース>

生まれつき左上下肢が欠損している女の子の事例です。知的障害は無いため、本来であれば通常教育を受けることができますが、家が山奥にあることと、金銭的な理由から学校に通うことが出来ませんでした。この度、同僚や周囲の人々の協力により学校に通い始めるようになり、ALS（Alternative Learning System）と呼ばれる特別クラスで授業を受けています。

ちなみに、通常の流れでは小学校を卒業するには6年かかり、その後高校に進学しますが、小学校で教わる内容を早く習得し、ALSの試験に合格すれば6年かからずに高校に編入することができます。

また、彼女は絵を描く才能があり、大人顔負けの繊細な絵を描くことが出来ます。今年9月、日本で開催される「世界子ども図画コンテスト（World Children's Picture Contest）」というコンテストに応募し、現在結果を待っています。コンテストの結果、今後の展望ともに非常に楽しみです。



これらはほんの一部ですが、家庭ごとに課題を見つけて、定期的に訪問して支援を行っています。

人によって症状も大きく異なるので、作業療法士や理学療法士のような役割を求められることもあれば、特別支援学級の先生のような役割を求められることもあります。

#### 【今後の活動の展望について】

これまで、各家庭を回って個別支援を行ってきました。

今後の目標として、支援している障害者同士を結びつけ、さらに周囲の人々を巻き込むことで包括的な支援を行えるようにコミュニティを形成することを考えています。

将来的には、障害者が集まり、様々なアクティビティを行える日本の作業所のような居場所を創設できないか、同僚と話しています。